

開口部と壁のリフォーム

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

普通の窓を出窓に変更

窓は室内外の雰囲気づくりにも貢献するアイテム。一般的な窓を出窓にするだけでもイメージチェンジが図れるので、リフォーム時に取り換えを希望されることも多いようです。

既製の出窓サッシにはデザイン、サイズともに種類が豊富にあるので、外観デザインや室内の雰囲気に合わせて選べます。また、現場施工の場合はオーダーメイドになるので、さらにデザインやサイズの自由度が高まります。

いずれの場合も、窓の大きさを変えないで出窓にするだけであれば構造的な問題はなく、工事も比較的容易です。

注意したいのは、雨じまいについて。既製の出窓サッシには、それぞれのメー

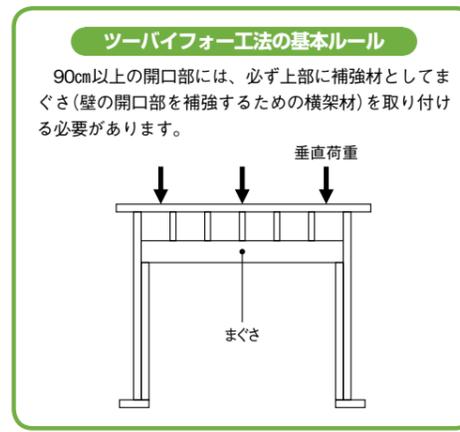
カーごとに施工マニュアルがあるので、それに則って、既存の壁との間に隙間ができないように、丁寧な施工を心掛けてください。

古いサッシをハイサッシに変更

ひと昔前のサッシの高さは1間(約1.8m)が標準でしたが、現在では約2mのハイサッシが主流です。わずか20cmの差ですが光の入る量は格段に違い、明るさも部屋の雰囲気も大きく変わります。サッシメーカーから高性能でデザイン性にも優れた既製サッシが数多くつくられており、出窓と同様に自由に選ぶことができます。

施工に関しては、出窓と同様、メーカーのマニュアルに忠実にすることが基本ですが、開口部の高さを変える際には、まぐさの高さを変える必要があります。

このシリーズの最初の回(本誌189号・2010年4月発行)で紹介したように、ツーバイフォー工法には構造上のルールがあり、そのひとつに「90cm以上の開口部には、必ず上部に補強材としてまぐさ(壁の開口部を補強するための横架材)を取り付ける必要があります。」



開口部には、必ず上部にまぐさを取り付ける」という項目があります。まぐさは壁の開口部を補強するために欠かせない要素であり、取り払うことはできません。したがって、ハイサッシを導入する際は、その高さに合わせてまぐさを高い位置に付け替える必要があります。



▲既製のハイサッシ

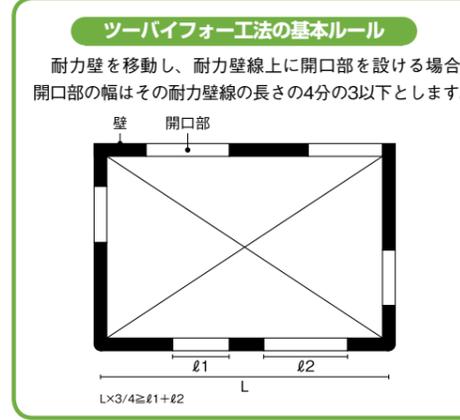
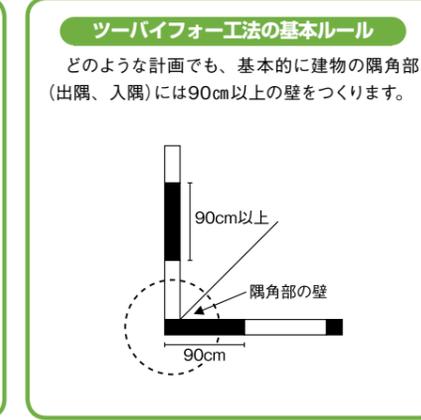


▲既製のハイサッシ

間仕切り壁の移動・撤去

壁の移動、撤去、新設などを、新たに複雑な構造計算をしなくても安全なプランを立てやすいのがツーバイフォー工法の利点のひとつです。

手がかりは新築時の構造図にあります。これを基に耐力壁線区画をつくることによつて、どこが移動・撤去できる壁か、できない壁か、ということを経験的に判断できます。



間仕切り壁は、構造に関わる壁ではないので、自在に取り外しが可能です。一方、耐力壁は基本的に撤去できませんが、全体の壁量が足りていれば、可能になります。ただし、撤去・移動の際は「壁線の4分の1以上の壁を残す(耐力壁線上の開口の幅を壁の長さの4分の3以下にする)」ことと、「建物の隅角部には90cm以上の壁を配する」というルールを守る必要があります。

要があります。

以上のように、ツーバイフォー工法の建物は、基本のルールをきちんと守り、事前に図面等を入念にチェックしていけば、リフォームの可能性が大きく広がります。このことを念頭に、積極的にリフォーム事業に取り組んでいただきたいと思えます。

* Case Study

間仕切り壁の変更で、若いご夫妻の暮らしに合った空間が実現

もともと二世帯住宅として建てられたこのお住まい。玄関も階段も2カ所にある完全分離スタイルを継承しつつ、新たに住まわれることになった若いご夫妻の暮らしに合わせたリフォームが計画されました。

ご夫妻の要望は、まだ幼いお子さん2人が元気にのびのびと過ごせる家にあること。特に奥さまは、食事の支度をしていられる間もお子さんに目が届くように、対面式キッチンにすることを切望されました。

そこで、以前は和室だった場所にキッチンを新設し、対面式キッチンの前をプレイルームに。和室と洋室との間にあった2つの壁は、廊下側は耐力壁、窓側は間仕切り壁であることを図面で確認。耐力壁は残し、間仕切り壁を撤去することで、広がりのある空間を実現しています。リビング・ダイニングからもプレイルーム



▲新設された対面式キッチン。目の前にプレイルームがありお子さんたちを安心して遊ばせることができる

ムが見渡せるので、お子さんたちを遊ばせながらゆつくりと食事ができます。階段脇のトイレを広くして、玄関横にあったトイレは撤去。その分、浴室と洗面脱衣室にゆとりが生まれました。いずれも間仕切り壁であることを確認済みだったので、自由にレイアウトを変えることができました。

問題は、水回りの新設・移動に伴う給排水管の新設。他の住宅メーカーで建てられた建物でしたが、床下に人が潜り込んで配管できるだけの開口があり、滞りなく作業が行えたとのこと。

「ツーバイフォー工法はオープン化された工法で、基本的に構造に変わりがない、ルールに則って建てられた建物であれば、新築時に施工した会社でなくても容易にリフォームに対応できることを実感した」と担当者も語っています。



▲キッチンに続くリビング・ダイニング。ここからもプレイルームが見渡せる



▲キッチンは充実した収納により、すっきりとした佇まい

西田 恭子(にしだ きょうこ)



三井のリフォーム住生活研究所 所長。住宅のリフォームを始めて25年。その経験を生かし、リフォームによる「暮らしの創造」に貢献するため、住生活研究所所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーでの講演等でも活躍。約200名の女性建築士集団であるデザインスタッフ会会長も務める。一級建築士。(社)日本建築家協会正会員。日本女子大学・文化学園大学講師。

著書 『リフォームで永く住み継ぐツーバイフォー』(ニューハウス出版) 『中古マンション購入×リフォーム』(アーク出版) 『リフォームでつくる幸せ家族』(主婦と生活社) など多数。

